「助け起こす祈り」使徒言行録 9：10-15

木村一充牧師

今朝は、使徒言行録 9 章からみ言葉に聞いてまいります。ここには、キリスト教の歴史を大きく変えた一人の伝道者の回心の出来事が描かれています。もし、パウロという人が存在しなかったら、新約聖書の半分を占めるパウロの手紙はなくなってしまいます。彼によって成し遂げられた世界伝道もなくなり、間違いなくキリスト教はパレスチナだけにしか信者がいない、一民族宗教にとどまっていたことでしょう。しかし、パウロのおかげで、キリスト教は民族や人種、性別や社会的身分を超えて、すべての人にあてはまる普遍的救いを説く宗教へと高められたのです。彼は、イエス・キリストの十字架の死を、すべての人にあてはまる神の救いの出来事として説き明かした神学者でもありました。その意味で、パウロは教会の歴史、いや世界史を変えた人物であります。しかし、そのパウロも、決してはじめから立派な人、いわゆる良い人ではありませんでした。むしろ、その逆でした。なぜなら、ユダヤ教を信じていたころのパウロは、熱心なファリサイ派に属しており、律法の教えに従おうとしないキリスト者たちを迫害し、彼ら主の弟子たちを根絶やしにしようと殺害の息をはずませるほど、激しい敵意を抱いていたのであります。

そのパウロの回心は、現在のシリアの首都、ダマスカスに向かう途上で起きました。そのシナゴグに集う者の中に、もしもキリスト者がいたら、男女を問わず彼らを抑え、縛り上げてエルサレムに連行するつもりだったのです。ところが、ダマスカスに近づいた時、突然天からの光が彼を巡り照らし、彼は地に倒れました。その時、「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか？」と呼びかける声を聞きます。「主よ、あなたはどなたですか？」と彼が尋ねると、「わたしは、あなたが迫害しているイエスである」と主は答えられました。サウロは起き上がって周りを見ましたが、目が見えなくなっていたということです。これは、どういうことでしょうか。天からの光は、二つのことを意味します。第一に、光は人の目をくらまし、その人を打ち砕きます。しかし、その一方で第二に光は人を照らし、周りを明るくします。パウロは、この光に照らされるまで、自分は正しい、自分には何の欠けもないと思っていました。しかし、律法による義を貫くために人を殺してもよいと考えるのは、明らかに行き過ぎであって、間違いです。自分で自分を義とするのではなく、神が義とされねばならない。天からの光は、それまでの傲慢なパウロを打ち砕くための、神の啓示の出来事でありました。このことは、決してパウロに限ったことではありません。神は私たちに何か特別な仕事に着かせる時、まず私たちに打ち砕きます。それまでの自己中心な生き方をしていた古い自分を壊し、上からのものを待つ謙遜な自分へと変えるのです。神を信じるということは、ある意味で無力になるということです。自分の力に頼ることなく、上からの力に全面的に頼るのです。パウロが復活のイエスに出会ったあと、三日三晩何も食べなかったということは、神の力に撃たれた結果、彼は徹底的に弱く小さなものにされたということではないでしょうか。

しかし、その弱り果てたパウロを助け起こしたもう一人のキリスト者が、ダマスカスの町にいました。彼の名はアナニアといいます。このアナニアは、新約聖書の中でここだけにしか登場しない人物です。そのアナニアが、幻の中で主イエスの声を聞きます「アナニアよ、立って『直線通り』と呼ばれる通りへ行き、ユダの家にいるサウロという名のタルソス人を訪ねよ。今、彼は今祈っている」（この「直線通り」は、今も 1800 メートルもまっすぐ市内の東西を走る通りとして、ダマスカスにあります）私は、この最後の言葉に注目したいのです。三日三晩何も飲まず食わずで、しかも目も見えないというパウロがただ一つできたこと、それが「祈る」という行為でした。パウロはそれまで教会の敵対者でしたが、今は主の力に撃たれ、神の前に全面降伏するその姿で祈っています。その祈りによってキリスト者であるアナニアとの和解が成し遂げられるのです。しかし、初めにこの主の言葉を聞いたアナニアは、反発しました。「主よ、わたしは、その男がエルサレムで仲間の信徒たちにどれほどひどいことをしてきたか、その悪い噂をさんざん耳にしています。今回

も、彼はわたしたちを捕らえるためにこのダマスカスにやってきたのです。そんな彼を目が見えるように助けに行くなどとんでもありません。いやです！」そう言って断りました。しかし、主の声はさらに続くのです。「行け、あの者は異邦人や王たち、またイスラエルの子らにわたしの名を伝えるためにわたしが選んだ器である。」あの男は、わたしが選んだ器だ。だから、訪ねてやってくれ。主なる神は、自分の弟子たちを迫害してきたパウロを、これからは自らの名を宣べ伝える器として用いると言われるのです。「アナニアよ。今は、お前の力、お前の祈りが彼には必要だ」主なる神は、そう言ってアナニアを促すのであります。そこで、アナニアは立って「直線通り」にあるユダの家に入り、サウロの頭に手を置いて祈りました。「兄弟サウル、わたしはあなたがここへ来る途中で出会った主イエスのお言葉により、あなたが元どおり見えるように、また聖霊で満たされるように祈るために遣わされたのです」すると、たちまちサウロの目からうろこのようなものが落ちて、サウロは元どおり見えるようになります。この聖書記事から「目からうろこ」という諺が広く使われるようになりました。それは、それまで自分を支配していた思想や信条、偏見や誤解から解き放たれることを意味する言葉として知られています。サウロは、こうして目が見えるようになると、バプテスマを受け、食事をして元気を取り戻します。そのまま数日の間ダマスカスの弟子たちと過ごした後、あちこちの会堂で「この人こそ神の子である」とイエスのことを宣べ伝えたというのです。

私は初めてこの箇所を読んだとき、こんなことがあり得るのだろうかと思わずに仕方がありませんでした。ほんの1週間ほど前には、教会の迫害者としてキリスト者を縛り上げて獄に入れ、彼らを殺そうとさえ思っていたその人が、今は敵であったキリスト者たちと一緒に「イエスこそ神の子である」と伝えているというのです。まさに180度の方向転換です。とうていあり得ない話です。しかし、私は思うのです。主なる神は、パウロのように頑固で、その信念を貫くためにはどんなことでもする敵対者を、あえてご自身の器として選ばれたのではないか。山が高ければ、谷も深いと言います。キリスト教に猛反対して、ユダヤ教を守るためなら、キリスト者を容赦なく迫害するという危険な人物を、神さまはその器として選ばれました。ご自身の業を推進なさるために、迫害を赦し、それだけでなく、迫害を推進した人物、敵であった彼を用いられるのです。パウロは、その回心を通して、ユダヤ教を信じ従った過去にも増して、イエス・キリストを信じ、この方に従ったのではないのでしょうか。それゆえに、私たちは「この人は決して神さまを信じることはないだろう」などと値踏みをして、決めつけ、切り捨てたりしてはなりません。考えてみてください。私たち自身が、かつては、神を知らない者、神に敵対する者だったではありませんか。

神は、私たちの常識を超えて、人を召されるお方です。さしも信仰のあついでアナニアも、パウロのこの突然の変化を理解できなかつたことでしょう。アナニアも、最初の頃は神の言葉よりも人のうわさのほうを信じていました。「普通の罪人なら救われるだろうが、まさかこんな大罪人が救われるはずがない」と思っていたかもしれせん。しかし、こともあろうにその大罪人が、100年いや1000年に一度現れるかどうか、というほどの偉大な伝道者になったのです。

そのパウロが、この時、アナニアの祈りの助けを必要としていました。アナニアは無名の一信徒にすぎません。学者でもなければ、大伝道者でもありません。一方のパウロは、優れた器です。世界史を変えるほどの人物です。しかし、そのパウロが立ち上がるためには、無名の一信徒の力を借りねばならなかつたのです。アナニアは、主のご命令を聞いて、最初はたじろぎました。しかし、最後は神の言葉に服従しました。本日の箇所を通して、聖書は、私たちがどれほどすぐれた力や能力の持ち主であろうと、自分一人の力では、それが働かないことを教えています。私たちが、神の前に砕かれ、低く小さくされる時、その私たちを覚えて祈ってくださる人がいる。それが、私たちを再び立ち上がらせるのです。私たちがまた、アナニアとなって、助けを必要としている罪人のもとに足を運び、祈る者になりたいと願うのであります。

お祈りいたします